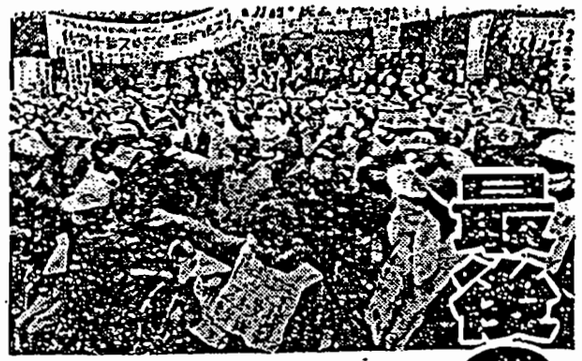
甲第一四六号証

朝日ジャーナル 85.12.13

最後のサムライ・千葉動労孤立の闘い



中核派の千葉動労支援集会(11月29日)

東京

日

中核派が行った破壊活動の派手な騒ぎにかき消されようとしているものがある。事件前日の一一月二八日に国鉄千葉動力車労組（中野洋委員長、一一〇人）が打ったストの意義である。国鉄分割民営化に対する、労組

本格反撃だった

始まった総武線中心の二四時間ストで、一三五本の列車が運休した。しかしこのストに対する国鉄労組、国鉄動力車労組の反応は極めて冷やかだった。

かつて「鬼の動労」という言葉があった。動労がスト権奪還ストを打ち抜いた一九七五年ごろのことである。「鬼」は分割民営については怒りを一度も見せていない。一〇年前には考えられなかった様変わりであり、一〇年の歳月が、労働組合に何を刻みつけて行ったかを、うかがうことができる。

かわりに動労から分裂し、これまで鬼っ子扱いされてきた千葉動労が、孤立の闘いをみせた。動労、千葉動労の両組織は、日本の労組の中で異色の存在である。それは両組織が新左翼のセクトと近く、動労が革マル派、千葉動労が中核派と人やイデオロギー面で、一部重なり合っていることである。少なくとも警察はそうみている。

動労はもともと、国鉄の中のエリートである機関士、機関助士を中心に結成された。列車を動かし、乗客の命を預かっているのは自分たちだという意識が強く、士がつく職能なので「サムライ」と呼ばれてきた。

それが一九七九年、成田空港建設反対運動をめぐって分裂し、動労本体から成田闘争支援の千葉動労が飛び出して独立王国を作った。以後千葉動労は成田闘争には国鉄の制服を着て、「動力車」と書いたヘルメットをかぶった部隊を送り込んでいる。

ハラをすえて闘いに決起する

これにこたえて中核派も千葉動労の闘いに大きな関心を寄せ、機関紙『前進』（一〇月二八日号）では「一一月動労千葉ストライキの支援・防衛闘争、一億円スト基金運動をまき起こせ。全学連はその最先頭で決起しよう」と呼びかけた。

けれども中核の都市ゲリラと同列にとらえている。ひとつは下山国鉄総裁怪死を引き起こした定員法に基づく九万四千人の人員整理（一九四九年）、もうひとつは総労働対総資本の対決といわれた三井三池炭鉱の四六〇人解雇（一九五九年）である。

中野氏は「思えばこの二年、マスコミも動員されたさまざまな中傷、ひぼうの中で、既得権が剥奪され、合理化が強行されました」として、一九八二年からの三年間に、一万人が合理化され、さらに八七年までに九万八千人が合理化されようとしている、「もうこれ以上引けないどたん場」を強調していた。

中野発言の裏には、現方針の九で国鉄労働者が結集しているから、二三兆円の赤字になったという世間の認識に対する無念の思いがある。東海道新幹線の建設以来の建設費のツケが累積赤字となり、首都トンネル、本四架橋が完成すると、国鉄の赤字は一挙三七兆円になると中野委員長は指摘している。労働者の生産性向上で消せる性質のものではないというわけである。

分割民営の将来について、新会社が赤字を引き継いで発足

する以上、明るい見通しは持てないこと、とくに独立する貨物部門は、二、三年で倒産すると分析している。そして「失うものは鉄鎖のみ」という古典的な比喩が飛び出す。

「総評や社会党の方針を見ると、いまこそ労働組合の色を隠して国民大衆に訴えなければならない、なんてことが書いてあります。そういうことで多数派を形成しようと言っているわけです。私はそうは思いません」

「世の中の人は、われわれ国鉄労働者が自らの命運を決める重大問題について、さらには日本の労働運動全体の方向に多大の影響を与える国鉄攻撃に対して、もっとハラをすえて本気になってたたかいに決起することを期待していることは明らかなんです」

中野委員長の主戦論の当否を分けるのは、やはり余剰人員の再就職についての客観的情勢だろう。さる七月答申を出した国鉄再建監理委員会は、①国、地方公共団体に職場を提供するよう一九八六年度から求める②一般産業界にも全国的規模で雇用に協力することを要望する、と述べている。しかしそれ以上の具体的措置も保障もない。答申が示す国鉄分割の時期は一年四カ月後の八七年四月一日。それまでに、何割が再就職できるのか、見通しが立っていない。

スト打てなければ負け犬です

千葉動労が抱いている危機感は当然と思えるのだが、他の労組、国労や動労は千葉動労のこの関志を迷惑がっているようにみえる。これがいままでの常識では理解できない点である。

両組織の内情にくわしい労働運動家は次のように話した。

「国労は分割反対、民営やむなしというのが本心とみていい。内部の社会党系がストを主張していますが、職場の段階で労組の力がなくなっている。たとえば〝分割民営化反対〟のワッペンを着ける闘争も、組合員は着けたりはずしたり、ためらってばかりいる」

そこまで国労の闘志が落ちたという。

かつては国労左派で鳴らした岩井氏は「定員法のころはクビ切り即飢え死にだった。いまは死というと大げさでしょう。それだけ雰囲気が違います。しかし再就職あっせんで全員を救済できないことがはっきりすれば、つまり生クビ取られれば国労もストで闘うでしょう」と冷く客観的に話す。

太田元総評議長は「一九万人のクビ切りが出るのであればストすべしです。千葉動労のストは労働運動からみて意味がありました。国労も動労も怒り者だとマスコミにたたかれて、敗北主義に陥っていろね。組合幹部が積極性を持たないと闘えない。いまのままだと負け犬です」と太田氏と同意見の人は、少数派に属するようだ。

（本誌・伊藤　正孝）

News Interface

国境を超える義務
―節度ある国際政治を求めて―
●S・ホフマン著／寺沢一監修
最上敏樹訳／2,500円
現代の重要な国際問題である武力行使、人権問題、南北問題について鋭い現状分析と問題提起を行ない、国際政治への現実的アプローチと道徳的要請を相解させる道を探る。

日本国憲法資料集
●福口陽一・大須賀明編
1,000円
日本国憲法のより深い理解のために、市民・学生にとって好個の書。日本国憲法に関する資料を文献・判例・新聞等から幅広く網羅し、憲法の章建てに沿って配列。

言論100年 日本人はこう話した
●芳賀　綏著／1,300円／選書123
福澤諭吉が日本人に〝演説〟をすすめてから一世紀。近代日本の夜明けの激動、電波メディアの出現、民主化と大衆文化の拡散など、〝もの言う日本人〟の変遷を活写する。

国語辞典編集資料1
国定読本用語総覧1 第一期（あ～ん）
●国立国語研究所編／25,000円
尋常小学校の国定読本で使用された全語彙とその用例を、全六期日巻で集大成する全集の初巻。明治から戦後に至る膨大な現代日本語研究の基礎資料。

三省堂